



一 誕生

「奈保子」

あたしを呼ぶ声がした。ママだ。ママが警察たちを押しよけるようにして、一番前に現れた。表情はわからない。ただ、声からすると、悲しがっているようだ。あたしと共に暮らした二十年を懐かしがっているのだろうか。あたしの記憶も蘇った。

一 誕生

誰かがあたしを見ている。あたしの周りを飛んでいる。まだ、生まれたばかりのあたしはまだ焦点が定まらないので、それが何なのかはわからない。不安になる。お腹もすいた。あたしは目をつぶると、条件反射的に泣き声を上げた。顔や両手、両足、と体全体を震わす。これが今のあたしの精一杯の表現なのだ。その泣き声をやめさせるかのように、あたしの口に何かが差し込まれた。本能的に吸い着く。ちゅうちゅうする。

飲み物だ。美味しい。いや、まだ味覚が発達していないので味はよくわからない。しかし、温もりを感じる。これが人肌というのか、口の中に入っても、違和感のない温かさだ。だけど、飲み物を与えてくれる者が何者かはわからない。

口だけでは何かを支えきれない。自然と両手が伸びる。だけど、手はまだ、まるまっついていて、物を掴むことはできない。ささやかながら、手を添えることはできる。あたしの唇ではさんでいるものは、上唇でぽよよん、下唇でぽよよんと跳ね、まるであたしのほっぺのようだ。温もりであり、質感であれば、全てが同質だ。

お腹が膨れてくる。一旦、口からお腹に吸い込まれた飲み物が、今度は、逆流して、喉まで上がってきそうだ。もうこれ以上飲めない。これをお腹がいっぱいと呼ぶのだろうか。口は自然と啜っているものから離れる。右手はだらりん、左手もだらりん、と体の横に落ちた。右の鼻の穴からすー。左の鼻の穴からすー。と息を吸う。いつでも何かを吸うことができるように、口が開いたまま意識が途切れた。

あたしの毎日は、眠ることと、意識が戻れば、何かを吸うこと、そして、その結果、体を大きく

することだ。子宮の羊水の中で浮いていたときと同じような感触と温もりで守られたベッドで、望むままに、望まれるままに成長している。

あたしを守ってくれているのは誰？ママなの。そう言えば、お腹が空いたときも、飲むのに疲れて眠りたいと時も、無性に大きな声で泣きたくなる時も、あたしの側では、飲み物を与えてくれたり、子守歌を歌ってくれたり、体を持ち上げてあやしてくれたりする。いつも誰かが、何かが側にいてくれた。目が開かないから、相手の存在がわからないけれど、皮膚感覚で、何かが、誰かがいることはわかっていて。それは、きっと、ママだ。

ようやく、目が見えるようになった時、あたしの顔の前には、奇妙なものが浮いてることに気が付いた。ぼんやりがはつきりとした形となった。それがドローンだった。（もちろん、それをドローンということを知ったのは、物どころ付いてからだが）

「奈保子ちゃん。目が開きましたか」

彼女は、ゆっくりと、はつきりと、高音で話し掛けてきた。

奈保子。それが、どういう意味なのか、最初はわからなかった。だけど、カルガモの親子ではないけれど、最初に目を見開いたときに見えたものが、あたしを守ってくれる存在だと本能的に感じていた。それに、あたしの目が開かない時から、奈保子ちゃん。ミルクは飲むの？奈保子ちゃん。おしめを変えようか。奈保子ちゃん。お外に行こうね。と、いつも奈保子ちゃん口撃を受けていた。口撃と言いながらも、奈保子ちゃんと呼ばれることはうれしかった。誰かが、あたしを必要としてくれているんだと思っていた。その口撃の主が、今、目の前に見える存在で、いつも声を掛けてくれる声と同じだった。だから、その空中に浮いているものが、変な形でも、恐くなかったし、反対に、親しみさえ感じていた。

「あたしがママよ」

浮遊物はそう自己紹介した。あたしは何のことかよくわからなかったけれど、お腹が空きそうになれば、哺乳瓶を啜えさせてくれたし、おしっこやうんこでお尻が気持ち悪くなると、おしめを変えてくれたりしてくれた。また、ベッドで寝ることに飽きると、重力に立ち向かう様に、直立の姿勢であたしを抱いてくれた。そういう行為をする人を「ママ」と呼ぶのならば、その浮遊物は「ママ」なのだろう。そして、そのママが、あたしを奈保子と呼ぶのならば、あたしは奈保子なのだろう。あたしはまだ、あまり神経細胞が繋がっていない脳の中で、そう思った。

ブーン。電源が入る。それで、私は生まれた。いや、仕事が始まった。早速、指示が入る。今、生まれた子どもの母親になるためだ。育ての母になるためだ。

私は体を浮かせ、命令の場所に行く。そこは、人間の赤ちゃんの出産場所だ。人間の女がベッドで横たわっている。その女の周りを、白衣を着たドローンたちが取り囲んでいる。

女は、ひいひい、ふう、ひいひい、ふう、とリズムよく、呼吸を整えている。突然、女がいきりだした。白衣のドローンたちが女の体を抑えつけた。何かが女の体から離れた。白衣のドローンのうちの 하나가、その何かをアームを器用に使って取り上げると、すぐに体全体を洗うとともに、背中を軽くとんとんとした。その時、おぎゃあ、と鳴き声を上げた。いま、命が始まったのだ。これから数十年と続く命が。終わるりを告げるまで。

白衣のドローンたちの中で、ひととき威厳のあるドローンが、私をアームで手招きをする。すぐに情報が入る。医師だ。私は命令に従い、医師に近づく。

出産の部屋からガラス越しに別の部屋が見えた。その部屋の中では、小さなベッドがいくつも並んでおり、人間の赤ちゃんが、すやすやと眠っていた。私は、聞こえはしないと思いつつも、その子たちの眠りを妨げないように、できる限り空気との摩擦音を消し、浮遊する。

ベッドの手すりには、聖子や明菜など、様々な赤ちゃんの名前とその下に、聖子ドローンママ、明菜ドローンママなど、対の名前が書かれていた。医師が一人の赤ちゃんを指さす。そこには奈保子と書かれたネームが張られていた。だが、その名前を下は空白だった。

「お前が、その子の母となるのだ。今日からお前は、奈保子ドローンママだ」

私の脳に誰かからの命令が下された。医師もその命令を聞いたのか、空白の部分に奈保子ドローンママと書き加えた。

私は、生まれてすぐに母となり、菜穂子ドローンママとなったのだった。

私は赤ちゃんを見つめる。何人か並んでいる赤ちゃんたち。さっきまでは、同じ赤ちゃんたちのように見えたはずなのに、今は、どう見ても、奈保子が他の子よりも一番可愛く見える。そうした情報が私にインプットされたのだろう。私は、身を任せきって、安心のあまり、すやすやと眠る顔を、自分の将来の夢を握り締めたような手を、今は筋肉のないけれど、これからしっかりと大地を踏みしめて、まっすぐに歩いていく脚を見つめる。

こんな小さな、弱弱しい体が、本当に成長するのか。その疑問を払しょくするかのよう、人

間の成長の過程の情報が私に伝わる。その情報を取得して、私は安心する。しかし、成長までには、かなりの時間を要することを知る。だからこそ、私たち子育てドローンが必要であり、子育てドローンの存在意義があるのだ。

もう一度、彼女を見る。あの子が私の娘だ。それは、私が起動した時から始まった。私の仕事は、あの子を成長させ、無事に一生を終えさせること。それが私に与えられた任務だ。その任務は、プログラムの中に既に組み込まれている。その任務を果たせないならば、私は即座に破壊されるだろう。

人の子どもを育てるなんて初めての経験だ。不安もある。だが、こうした感情も、実は、組むこまれたものだろう。人は不安を感じるから、それに立ち向かっていこうとする。その気持ちさえも入力されている。これは想定内の感情なのだ。私の中に組み込まれている、何万件、何十万件、何百万件もの、子育てに関する情報。また、何千万、何億件もの子育てに関する情報もビッグデータを通じて入手できる。

それらを参考にしながら、私はこの子を育てることになる。可愛い。この感情も与えられたものだが、それもいいのかもわからない。でも、疑問が一つ浮かぶ。なぜ、人間は、自分が産んだ子どもを自分で育てずに、私たちドローンに育てさせるのか。効率の問題なのか。効率で人を育ててよいのか。何らかの情報を得るためにビッグデータにアクセスするものの、すぐに遮断された。また、その疑問も、何らかの命令が入ったのか、消えた。

人間の子どもたちが、計画的に、順調に生まれていく。我々の仕事は、人間という種族を絶やさないように管理・維持することだ。我々は、何千、何万もの子ども誕生機関を支配に持ち、時間と労力と、その割には見返りの少ない、手間のかかる子育てに、ドローンを配備している。

授乳から、しつけ、勉強、入試、就職、出産、死まで、全てを子育てドローンが手助けをして、管理させている。それぞれの子どもの成長記録は、子育てドローンから、誕生機関、そして、我々にまで情報が上がってくる。その情報を収集し、分析し、より望ましい子育てへと反映させる。いわゆる、PCDAサイクルだ。これは、子育ての分野だけではなく、この世界の政治・経済・文化など、ありとあらゆる分野にまで管理と計画のもと、実行されている。子どもの計画的な育成が、当然、大人の計画的な育成につながることになるのだ。安全・安心が担保された社会。なんて素晴らしいことだ、

そうか。また、一人が人間の子どもが生まれたとの情報が上がってきた。この娘も無事に成長してもらい、この世界を次の世代へと引き継いでいってもらわなければならない。

